

令和2年度岡山県立岡山御津高等学校第3回学校運営協議会

- 日 時 令和3年2月2日(火) 15:00～16:50
- 場 所 岡山県立岡山御津高等学校 産振棟3階 ビジネス実習室
出席委員11名(全委員14名)

1 開会

2 副会長挨拶

先日公民館大会が開催された。テーマは「若者をどう取り込んで地域の中で育てていくか」ということで、グループで「地元の高校をなんとか魅力的にするにはどうすればよいか」について協議した。

御津の中で、岡山御津高校が中心になってやってもらわないとだめだというのが共通の思いである。次年度から「Reborn 新しく生まれ変わる」ということで何年かかっても魅力ある岡山御津高校にしていくために、地域の中でも協力体制が必要であるし、色々な形で皆でやっていくことが大切である。

今回は第3回ということで今年度の評価も大事だが、コロナ禍の中で出来たこと、出来なかったこと、色々あると思うが来年度に向けてどういう形でやっていくのかを中心に話し合いができればと思う。

3 報告

(1) 学校経営に関する報告(校長)

○ 年度当初の計画のうち新学科の広報について

広報手段を大きく変え精力的に取り組んできた。説明会等での新学科に対する関心も非常に高く手ごたえは感じていたが、すぐには志願者増につながっていない。これまでの根強い学校のイメージがなかなか払拭されないが、初年度からしっかりと実績を積み上げていくことが大切である。

○ 最終報告

今年度のスローガンである「指導と評価の一体化」「定着・獲得・実感」の観点から学校自己評価のうち「学力の向上」「可能性を引き出す生徒育成」「人権教育と道徳教育の強化」「学校満足度」について

○ 令和3年度の方向性

よりできた、わかった、伸びた、成長したという結果が出せるよう、さらに教育活動を高めいていく。

○ 働き方改革について振り返り

業務の効率化、時間外勤務の要因、時間外勤務時間超過者への対応について

(2) 第2回自己評価アンケート(12月実施)集計結果を踏まえた取組(教務課長)

○ 若手OJTチーム(20、30代の教員14名)を中心とした取組

自己評価アンケートは、今年度から年2回実施(1学期末、2学期末)した。評価は学校教育活動のPDCAサイクルのCの基礎資料である。1年間の教育活動がどのように実行されたのかを評価し、次年度に向け改善のために役立てる。

今回、2学期末のアンケート集計結果を踏まえ、今年度残り2ヶ月の学校生活で直ぐに取り組める改善策があればやってみようと、小さなPDCAサイクルを実行する取組を考えた。データを分析、解決できそうな課題を設定、改善策を考え、職員会議でチームごとに改善策を提案し、実際に取り組んだ。

Aグループ

(課題) 学習習慣及び学習を振り返る習慣を確立させること

(提案) G-suiteを活用して振り返りや確認テストを実施する

Bグループ

(課題) ある程度できていることをさらによくできるようにすること

(提案) 自分の思いを言語化することに焦点を当てる「ハピメモ」を実施する

Cグループ

(課題) 授業中の迷子を減少させること

(提案) 授業の中で、今何をすべき時なのかカードで示して見える化する

現在、実際に行われているのはBグループが提案した「ハピメモ」(ハッピーメモリー)である。帰りのSHRで、毎日その日1日を振り返り、「よかったこと」、「ありがとうの一言」、「自分をほめよう」の3項目で自分の考えを言語化している。

この取組でポジティブに1日を振り返ることが出来るようになった。振り返りをするにより、自分の思いを言語化することを意識して生活できるようになった。少しずつではあるが効果を実感している。自己評価の結果を受けた3学期の小さなPDCAサイクルの取組である。

(3) 学校行事「御津の日2020～広げよう夢の懸け橋～(令和2年11月13日)」の記録動画とクラス紹介動画の視聴

4 協議

グループ協議、全体共有

ア 今年度の取組の成果と次年度に向けての課題

(主な意見等)

- ・学校満足度について、卒業時に「この学校を卒業出来てよかった」と思うことが学校の一番の評価であろう。1、2年次では低いところもあるが学年のばら

つきについては学年のカラーがかなり可能性としてある。年々その傾向は強まっている。

- ・活動を通して得られる満足度は低かったのではないか。
- ・「わからない」が少なくなっているのは、YES、NOというところで関心がある。NOは厳しい評価であるが学校に目を向けているので良い評価、悪い評価ができる。
- ・掃除のありかたを「やらされている」「これをすればおしまい」という与えられたものでなく、自分達で話し合っってやっていくような考えにシフトチェンジするべきではないか。
- ・インターンシップについては、自分で見つけて自分でアポをとっていけば、かなり成果が上がるのではないか。
- ・ルネス学発表会について、参観者の制限をするならば、回数を増やせばもっと参観してもらえる。
- ・地域課題発見解決学習について、学んだことは地域に返すべき。特にみつ検定、獅子舞オブジェは地域に協力してもらっているのもそのままにせず、来年どうなるのかということも含めた仕組みづくりを進めていくことが必要である。
- ・「頼もしい公民館」としっかり連携を取ることが大切である。
- ・生徒は発表の場が増えると、発表という体験の場が増え、地域からの評価を感じることができる。
- ・「評価シートを作成すること」が評価できる。
- ・体験的な学びの項目で生徒の自己評価が高いのはよいことである。
- ・アンケートの言葉を生徒は理解できているか、平易でより具体的な表現にすれば出来ていること、出来ていないことがわかりやすいのではないか。
- ・主体的に学ぶ力は新学科では必須であろう。
- ・学習習慣については、親が思っているほどは強いていない。
- ・色々な生徒がいる中で、評価の在り方も均一的なものではなく、いろいろな視点から実施する必要がある。例えば凸凹な評価があってもよい。
- ・評価資料がよくまとめられている。すごいことだ。一つ一つを検証した上でうまく活用できるとよい。
- ・ICTは今後どのように活用していくかが大切、授業でしっかり活用してほしい。
- ・オープンスクールでルネス学の発表など工夫してはどうか。
- ・「居場所カフェ」これが有効だとよい。全国的にも数少ない取組であり、岡山県内では本校がどのようにやっていくのが重要になる。人権、道德教育に関わってくるし、カウンセラーとの協働もあればよい。
- ・家庭学習は小さい頃からの積み重ねが大事であろう。指導者と生徒のギャップを埋めていく作業が大切である。
- ・PTA 活動がほとんどできていないが、豚汁やたい焼きがなくなってみて生徒は楽しみにしていたのだろうということがよく分かった。早く活動ができるようになればよい。
- ・あいさつについては、生徒、保護者ともにAである。

- ・ルネス学の実践は、生徒はすべてというわけではないが、教員を中心に頑張っている。このまま継続していけたらよい。
- ・生徒と保護者で意見の隔たりがあるもの、例えば基本的学習習慣については、保護者はAであるが生徒はまだなので、保護者と生徒を巻き込んだ取組が必要である。ICTの活用については、生徒は比較的高い数値だが保護者は低い。生徒が保護者にICT（タブレットやスマホ）の活用を「こうやれば楽しめる」「こうすれば便利だ」と伝えるような取組を学校の中でしていくことも、隔たりがなくなる方法ではないか。

イ 魅力化推進事業について

- 令和3年度からの実施にあたり研究内容（どのような視点で何が出来るか）のアイデアとコーディネーターの人選について
- 学校と地域が連携・協働して何が出来るかどういった人物がコーディネーターとして活躍してもらえるかについて

（主な意見等）

- ・人より組織で選んだ方がよい。コーディネーターは人と人との繋がりである。公民館という組織とつながった方がよい（館長さん）。公民館は地域連携という点では要である。
- ・地元の足場固めも大切であるが、幅広い視野も必要である。
- ・キャリアデザイン科で何をやるのかどうやっていくのかの具体的な取組や実習と、どうつなげていくかが大切である。
- ・ターゲットを絞った人選をしてはどうか。例えば農業なら農業関係、商工会との繋がりなら商工会など。
- ・岡山御津高のよさを売り込んでもらえる方がよい。
- ・伝える力、発信する力があってフットワークの軽い方。例えば経営コンサルタントがよい。
- ・大学院生などをお願いしてもよいのではないか。新しい視点で御津の地域を生徒と一緒に回って色々な発見ができ、より新たな御津を知ることができる。地域をよく知っている方はもちろんなのだが、新しい風、新しい視点を吹き込むような方もよいのではないか。

5 事務連絡

今後の予定について

来年度も引き続き委員をうけていただけるようお願いいたします。

6 会長あいさつ

7 閉会

第3回 学校運営協議会

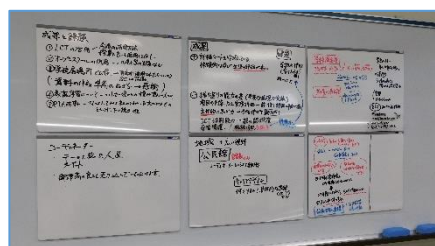


一年間の学校経営
計画・取組を
振り返ります

若手中心に生徒育成
のPDCA
ハピメモでほめる！



高校魅力化について
も話し合い



- ルネス学の発表の機会を増やして多くの人に見てもらおう！
- 公民館をもっと活用しよう！
- 授業でICTをもっと活用しよう！
- オープンスクールの内容を工夫したらいいんじゃない？！
- 岡山御津高校を売り込んでくれる人がいたらありがたいっ！
- キャリアデザイン科の具体的な取組をもっと伝えよう！

